

音楽大学における英語プレゼンテーション力育成 — プレゼンテーション・テキストの分析を通して —

Developing English Presentation Skills in Music Colleges: An Analysis of Presentation Textbooks

大和久 吏恵 OWAKU Rie ロン 美香 RON Mika
中西 千春 NAKANISHI Chiharu

音楽大学の学生は特有の学習ニーズを有しており、これを踏まえた英語教育の検討が必要である。本研究では音大生の英語プレゼンテーション教育に焦点をあて、その改善策を探る。6冊の既存のテキスト分析から、音大生のニーズを完全に満たす教材は存在しないことが明らかとなった。音大生の英語プレゼンテーションの目標において、非言語的スキルや音的要素は重要であり、英語教育においてこれらの要素を身に付けることは、演奏にも有益であると考えられる。他方、ブレインストーミングのような準備段階や論理的なプレゼンテーション原稿の作成も強調されるべきだ。音大生の聴覚の特性を最大限に利用する指導方法が効果的であり、学年やレベルに合わせたカスタマイズが求められる。音大生の日常の練習や時間の制約を考慮し、その特性を生かした指導が必要とされる。本研究から得られた知見をもとに、より実践的で効果的な音大生向けの英語教育の提供を目指す。

キーワード：英語プレゼンテーション、テキスト分析、音楽大学、教育課題

1. 研究の背景

大学の必修英語授業においては、統一カリキュラムや教材が広く導入され、東京大学、近畿大学、大阪市立大学などがその例として挙げられる（参照：<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/academics/institution/eedc>）。英語を担当する教師は多様な専門（英米文学・音声学・英語学・言語学・英米文化・英語史・英語教育など）を持ち、専任教師よりも非常勤講師の人数が多い現状において、統一カリキュラムや教材の活用は授業の質を担保する重要な手段であり、これによって学生の英語力の向上が効率的に図られていると推察される。

筆者らが勤務する国立音楽大学でも、統一カリキュラムと教材が採用され、教育活動の一部としてプレゼンテーションが取り入れられている。カリキュラムや教材の統一だけでなく、英語熟達度に応じたプレゼンテーションの目的や指導法、評価法について教師間で共通の認識を持つことが求められているが、現在その状況には達していない。

音大生は毎日、演奏に対する高い自己表現力が求められ、その向上に励んでいる。しかし一方で、これまでの調査（中西, 2021; 中西・川井, 2022など）によれば、多くの学生は英語に対する学習意欲は高いとは言えず、英語を自分の主要なツールにしようとする学生は少ない。音楽大学の英語授業を音大生の関心・生活・習慣に対応した形にカスタマイズすることで、学生のモチベーションを向上させ、思考力と言語力を養う可能性があるとして筆者らは推察する。

本研究では、音大生のプレゼンテーション力の育成について再考することを目指す。そのために、既存のプレゼンテーションに関するテキストやプレゼンテーション用と分類されているテキストを分析し、音大生の現状に対応した現実的な目標の設定と指導法の考察を行う。

2. 英語プレゼンテーション教育の課題

経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」は、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の

3つの要素から成る。「チームで働く力」は6つの下位要素を持ち、「自分の意見をわかりやすく伝える力」、「相手の意見を丁寧に聴く力」、「意見の違いや立場の違いを理解する力」は、音楽大学の英語プレゼンテーション教育によって育成可能である。

音楽は多くの音大生にとって、自己表現の主要な手段であるが、英語を自己表現の手段にする者は少ないと先に述べた。しかし、自己の意見を英語で明確に伝える能力は、国際的な音楽界でのパフォーマンスにおいて強力な武器となりうる。音大生の自習時間における英語学習の傾向と、限られた時間内でプレゼンテーションスキルを習得する必要性を踏まえ、指導法を再考することが求められる。

英語で効果的なプレゼンテーションを行うためには、日本語で書かれた原稿を単に英語に翻訳するだけでは不十分である。言語はその使用者の文化とコミュニケーションスタイルを反映するとメイヤー（2015）は指摘している。これに対し、野中（2020）は、日本のハイコンテクスト文化が他者に考えを伝える際に、論理や表現を重視してこなかったと述べている。ハイコンテクストな文化では、相手との関係性や状況、文脈、話の流れなどがコミュニケーションに大きな影響を与え、非言語的要素が重視される傾向がある。

近年の大学英語教育において、プレゼンテーションは学習者のコミュニケーション能力やスピーキング能力を高めるために有効な教育手法であると考えられている。しかし、プレゼンテーション教育の様々な問題点や改善点も指摘されている。

岡田他（2017）は、英語プレゼンテーション教育における達成目標理論の重要性と問題点を論じている。達成目標理論とは、学習者の目標の種類や志向性が学習者の動機付けや学習成果に影響を及ぼすという理論である。一方、日本の英語教育の現場では、英語力向上を目指す授業が多い。また、英語プレゼンテーション教育においてはスピーキング能力の向上が中心となっており、達成目標理論を用いた指導が十分に行われていないという問題が存在する。田村他（2017）は、英語母語話者のプレゼンテーションスタイルに従うのではなく、日本人らしさを表現できるような国際英語（EIL）を用いることが必要であること、仁科他（2013）は、英語と日本語のプレゼンテーションにおける事前準備の違いを理解し、自律学習方略を効果的に活用することが重要であることなどを示している。

田村他（2018）は、大学英語プレゼンテーション教育の主要テキストの内容を分析し、その問題点や改善可能性を明示している。テキストの分析によれば、基本的なプレゼンテーションスキルへの重視は認められるが、プレゼンテーションの内容を豊かにするためのブレインストーミングやリサーチについてはほとんど触れられていないことがわかった。この結果は、学習者が自身の考えを発展させる方法やそれを論理的に伝える技術の重要性を十分に習得できない可能性を示唆している。そのため、田村他は情報の整理やアイデアの構築などの能力を養成するために、指導法の改善を提唱している。

これらの研究から、プレゼンテーション教育は、単に英語力やプレゼンテーションスキルを向上させるだけでなく、情報の整理やアイデアの構築、聴衆とのコミュニケーション、自己表現や批判的思考など、グローバル社会で活躍する人材に必要な能力を育成するためにも有効であることがわかる。大学英語教育におけるプレゼンテーション教育は、多くの研究者から注目されており、その有効性や改善方法について様々な提案がなされている。このことから、音大生に対する英語プレゼンテーション教育を考える際には、適切なテキストの選択から始め、テキストが補完しきれない部分を明確にすることで、共通教材と共通カリキュラムを最大限に活用できると考えられる。

3. 研究方法

本研究で比較したプレゼンテーション・テキストは計6冊である。国立音楽大学の必修英語授業で採択している *Speak Easy*（金星堂）、*In My Opinion*（金星堂）と *This is My Presentation*（桐原書店）に加え、出版社から

大学で売れ行きの良いテキストを選んでもらい *Speak It Up* (三修社), *Ready to Present* (National Geographic Learning), *Present Yourself 1* (ケンブリッジ大学出版) を追加した。

またテキスト分析は2通りの方法で行った。まず田村他 (2017) が、テキスト内容を詳細分析するために「テキストが扱う項目一覧」を提案しており、そこに記述されている a) 身体的要素 (アイコンタクト, ジェスチャー, 姿勢), b) 音声的要素 (発音, 強勢の置き方), c) 準備方法の要素 (ブレインストーミング, 要点整理, 下調べ, 聴衆分析), d) 原稿作成の要素 (構成, 話題転換を示す語, 発表の種類), e) 視聴覚的要素 (資料作成, 資料説明), f) 言語的要素 (文法, 慣用表現), g) その他の要素 (フィードバックと評価) の7要素全てを使用した。カッコ内に各要素の具体的なスキルを記したが, g) その他の要素に記載されていた「質疑応答の仕方」スキルのみ解釈がやや不明瞭であると感じたため, 本研究では削除した (表1参照)。評価方法も田村他と同様に「○△×」の3基準で分析した。「○」は該当項目についての説明と練習問題が掲載されているもの, 「△」は該当項目の説明のみにとどまっている, もしくは該当項目の説明が省かれその重要性のみ言及されているもの, そして「×」は該当項目の記載がないものとした。筆者らが各自で6冊を独立して分析し, 判定に違いが出た項目については, 多数決による合意を通じて最終評価を確定し, テキスト分析の客観性を保った。

二つ目の分析は上記6冊のテキストの良い点と, 英語教師による補足が必要と思われるポイントについて, 筆者らが自由記述で探った。国立音楽大学生の英語レベル (A・Bグレード) や授業目標である「4技能をバランス良く授業に取り入れ, 実践的なコミュニケーション能力を養い, ライティングやスピーキングの形で発信したりプレゼンテーション力を育成する」ことを踏まえながらどのようなテキストが効果的か検討した。

4. 分析結果

4. 1. テキスト項目分析

まずプレゼンテーション・テキストに含まれるスキル分析の結果から説明したい。出版社が提示する TOEIC スコア別難易度をもとに, テキストを左から易しい順に並べたものが表1である。この中で○が付いたスキルが, テキストで十分な取り扱いがあると判断し, テキスト間で相違があるのか探った。

難易度を問わず, ほぼ全てのテキスト (5冊83.3%) に含まれていたのは, 原稿作成の要素と言語的要素であった。具体的には原稿作成に必要な Introduction, Body, Conclusion などの「構成」や, First, Next などの「話題転換を示す語」, そして「慣用表現」だった。これらは発表を準備するうえで不可欠な基本知識であるため, 英語レベルに拘らず重点的に学習させるのだと考える。

反対に取り扱いがほぼ皆無だったのは準備方法の要素にある「下調べ」(1/6冊16.6%) と「聴衆分析」(0/6冊0%) の2スキルだった。大学で行うプレゼンテーションはほぼ日本人学生のみに向けられたものであり, 聴衆分析を指導する必要性が低いのだろう。また独創性や学術的裏付けなど高度な発表はさほど求めないため下調べも省かれていると推測する。これは田村他 (2018) と同様の解釈である。

次にテキストの難易度により扱う項目が変化するか探った。6冊のテキスト中 *In My Opinion* (金星堂) のみ, ロールプレイ中心の対話型で構成されていたため, この分析項目に合致しないことが多かったが, 敢えて除外せずに含めることにした。

難易度が高いテキストのみが扱っていたのは身体的要素である「アイコンタクト」, 「ジェスチャー」, 「姿勢」と音声的要素の「強勢の置き方」だった。学生の基礎英語力があることを前提に, プレゼンテーションスキル全般を網羅しているのが特徴的だ。言語・非言語的要素の定着やパワーポイントなど視聴覚資料を使用したより高度な発表を要求したり, 学生間評価を通して相互学習を促すなど様々な工夫がみられた。

反対にテキストの難易度が下がるほど扱う要素が絞られてゆき, 基本スキル以外は解説や練習問題が省かれていることが多かった。その代わり文法が占める割合が増えることから, 再入門や初級テキストではプレゼンテ

シヨンの基本に焦点を当てている。学生のスキル習得のハードルを下げ、短くても正確な英語で話すことができるようにすることを目的としているようだ。

表1 プレゼンテーション・テキストに含まれるスキル項目一覧

要素	スキル	<i>Speak Easy</i>	<i>Speak It Up</i>	<i>This Is My Presentation</i>	<i>In My Opinion</i>	<i>Ready to Present</i>	<i>Present Yourself I</i>
		再入門 ~400	再入門 300~500	初級 430程度	初中級 300~500	中級 380~700	中級 225~780
身体的要素	アイコンタクト	×	△	△	△	○	○
	ジェスチャー	×	△	△	×	○	○
	姿勢	×	△	△	×	○	○
音声的要素	発音	×	△	△	○	○	×
	強勢の置き方	×	△	△	×	○	○
準備方法の要素	ブレインストーミング	△	○	△	×	△	○
	要点整理	△	○	△	△	○	○
	下調べ	×	○	△	×	×	×
	聴衆分析	×	×	△	×	×	×
原稿作成の要素	構成	○	○	△	○	○	○
	話題転換を示す語	○	○	△	○	○	○
	発表の種類	△	○	×	△	○	○
視聴覚要素	資料作成	×	○	△	×	○	○
	資料説明	△	○	△	×	○	○
言語的要素	文法	○	×	×	○	×	△
	慣用表現	○	△	○	○	○	○
その他の要素	フィードバックと評価	△	○	×	△	○	○

4. 2. テキストの利点と音大生のための活用法

プレゼンテーション・テキストの長所と音大生を指導する際どのように教師が補足すべきなのか該当テキストの取り扱い項目や使用言語、トピック、テキスト構成などについて筆者らが自由記述で分析した。先にも述べたとおり国立音大では2段階のクラス分けがされており、中級(Aグレード)初級・再入門(Bグレード)の学生の英語力を念頭に内容を分析した。

再入門者でも十分使用できる再入門テキストの*Speak Easy*は英検3~準2級レベルの語彙・文法を使用している。また4技能がバランス良く扱われており、説明や指示文は日本語であるため学生の負担も少ないのが利点だ。そのうえ、会話は簡潔に4文で示してあり、取り扱いトピックもほぼ日常生活の範囲内に留まっているため、英語苦手意識も抑えられそうである。しかしクリエイティブ・ライティングがなく、プレゼンテーションを行う方法も最低限の説明しかないため英語力があるAグレードには内容が易しすぎる。またテキスト後半はディスカッションとディベートになっているため、大学の指導目標と少しずれがある。Bグレードの学生でも内容をしっかり理解するには基本文法の補足説明が必要だろう。

前述のテキストと同じく再入門者から学ぶことができるのは*Speak It Up*である。このテキストの取り扱い項目はスピーキング、リスニング、ライティングの3技能で*In My Opinion*と似ている。日本語説明が最小限に抑えられているにもかかわらず、日本人学生が自信を持って話せるように工夫されている。スピーキングも対話とプレゼンテーション両方を扱い、リサーチやポスター作り、相互評価や自己評価まで丁寧に含めている。プレゼ

ンテーション一連の流れを身につけさせることで学生の成長を促している。この教材は書き込み式で空白が多いので、教師が配布物を作成する手間が省ける一方、内容を自由に発展させることもできるので教師の力量が試される。英語に対するモチベーションがやや低く、基礎力を補わなければならないBグレード向きと想定する。

This is My Presentation は英語4技能と異文化コミュニケーションを取り入れた総合教材だ。基礎スキルが身につけている学生を前提に作成されているため語彙や文法などBグレードではかなり補足が必要だろう。指示文や説明が日本語で書かれているので馴染みやすいが、モデルプレゼンテーションの難易度が高く、パワーポイントの利用やデータ活用、ハンドアウトの準備など発表を行うために必要なステップがまとめられている。また特徴的なのは日本的視野だけでなく海外視野や他者意識も持たせる工夫がみられる。全体的に文字の説明が非常に多く、情報を効果的に習得するには図を含めたり、構成や内容の精査について教師が別途ハンドアウトなどを準備したりする必要があるだろう。Aグレード向きのテキストであるが、使用する場合は音大生の興味に沿った音楽関連の題材を追加する必要があるのではないだろうか。

次に *In My Opinion* だが、こちらも指示文が日本語であるため違和感なく学べるテキストである。取り扱い項目はスピーキング、リスニング、ライティングの3技能で、4.1. でも述べているがロールプレイや会話などの対話型学習の構成になっている。インタラクションを通して慣用表現を繰り返し練習でき、リスニングは短い会話からスピーチへ移行するため徐々に難易度が上がる。またその過程でノートテキングスキルを磨きながら要点を掴む練習もできる。トピックは日常生活に関するものが多く、Bグレードでも取り組めるが、文法練習が少ないため教師の補足が必要だろう。また教材が予めロールプレイ用のアイデアを提供しているため、Bグレードの学生は例文に頼りがちで、内容がマンネリ化しがちだ。しかし英語力があるAグレードであれば応用・発展させながら個性的な会話を楽しめる。教師は音楽に関連した題材を追加したり、アイコンタクトやジェスチャーなど身体的要素を追加指導すれば更にネイティブ風な会話練習ができる。ただし外国語コミュニケーションの授業目標であるプレゼンテーションが含まれないテキストなので注意が必要だ。

最後に中級レベルの洋書2冊を説明したい。まず *Ready to Present* は4技能全てを細やかに説明しているため、大学受験英語をしっかりと学んだ学生向けのテキストだと考える。プレゼンテーションスキルの説明や実践も豊富で、例えば身体的要素や表・グラフの利用、ビジュアルエイドの効果的な配色など学ぶことができる。だが英語基礎力がない学生だと情報過多になってしまうので注意が必要だろう。質問形式を多くとっているため学生間のコミュニケーションを促せる一方、テキスト後半は社会的なテーマで構成されているため音大生には取り組みにくいかもしれない。教師の文法・語彙・語句解説があればBグレードも使用可能かもしれないがテキスト内容がかなり濃いためAグレード向きと考える。

最後に *Present Yourself II* は身近な題材を使用しつつプレゼンテーションスキル全般を伸ばさせるべく、細やかに指導するのに適した書である。英語解説やビデオ内容などしっかり理解するには、安定した英語力が必須である。アクティブにもアンケート調査やデモンストレーションなど独創性を活かせるため学生を惹きつけられる内容だと感じる。纏まった資料を読んでスクリプトを作成するようなリーディングスキルは含まれていないが、リサーチを要する発表の手前までカバーしており、欧米スタイルのプレゼンテーション技術が多く学べる。難易度の高いテキストであるため、それだけ教師の知識と力量が試される。Aグレード上位レベルの学生であればスキル向上を実感できるのではないだろうか。

5. 音大生の現状に即した習得を目標とするべき項目と指導法

5. 1. 音大生の現状

一般的な大学生を対象に作成されたプレゼンテーション用テキストを使用して音大生を教育するには、教師の補足が必要なことを前章で説明した。1・2章でも触れたとおり音大生の多くは「英語に対する学習意欲が高いとは言えず」、総合大学の学生と比較すると留学等で国際的な経験を積んだり英語（外国語）を使って就職およ

び自己実現を果たしたりすることを目標に設定していない者も多い。音楽に熟達することこそが就職や自己実現につながると考えて、ほとんどの学生が放課後は音を出せる時間を最大限に使って練習に励んでいる。英語の課題や学習を行うとしてもその後になる傾向がある。

しかしコロナ禍を経て状況は若干変化してきている。例えば2020～2021年度は国内外研修奨学生を海外へ派遣できなかったが、2022年度からは派遣できるようになり、海外で開催されるセミナーに参加する学生も戻ってきた。実績として2022年度には5人、2023年度には6人の学生をヨーロッパに派遣した。各国の学生が集まるセミナーでは主言語が英語であり、英語で「自分の意見をわかりやすく伝える力」が求められる。実際にセミナーを終えた学生の中には「英語で質問する力がなかったから、先生に指導が受けられなかった。ブロークンな英語でも質問をしていた他国の学生には、先生が多くの指導をしてくださり、彼らは短期間で上達していた」と後悔を述べている者もいる。また一部ではあるがコロナ禍で自己表現の場をYouTube等のメディアに求めた学生もいる。広く自分たちの歌を発表したいため、日本語歌詞の他、英語歌詞にも挑戦したが、リエゾンがわからず筆者に指導を頼んできた者もいる。このように、国際的な音楽界において外国語とりわけ英語を使って発信できる音楽家が有利であることに、音大生も気づき始めてはいる。

5. 2. 習得を目標とするべき項目

本学のディプロマポリシー（教育目標）6項目のうち、以下の3項目を外国語コミュニケーション（英語）で培うことを目標としている。

1. 現代・過去の音楽、文化、社会に対して多面的な関心を持ち、生涯にわたって、自主的かつ自律的に学修することができる
2. 音楽のみならず文化や社会について幅広い知識を身につけている
6. 大学で学んだことをもとに、音楽家あるいは教育家として、社会参加しようとする態度をもつ

外国語コミュニケーション（英語）では、系統を2つに分けそれぞれの授業目標を以下のように設定している。

a 系統（主にアウトプット）

- ① 内容豊かに、効果的に伝えるコミュニケーション力を身に付ける
- ② シンプルな英語で行うディスカッション技術とプレゼンテーション技術を身に付ける

b 系統（主にインプット）

- ① 語彙力をつける
- ② 「聞く・読む・書く・話す」練習を通して、生活言語能力(BICS: Basic Interpersonal Communicative Skills)を身につける

以上ディプロマポリシーと外国語コミュニケーション（英語）の授業目標は本学のものであるが、一般的に音大生にとって現実的な目標とは、自己発信ができる英語技術を習得することであろう。これは「社会人基礎力」における「チームで働く力」の下位要素、「自分の意見をわかりやすく伝える力」「相手の意見を丁寧に聴く力」「意見の違いや立場の違いを理解する力」にも通じ、英語プレゼンテーション教育を介して育成することが可能である。

そこで筆者らは6冊のテキスト分析を行い（表1参照）、それを基に音大生がプレゼンテーションにおいて習得を目標とするべき項目を以下にまとめた（表2）。

表2 音大生が習得を目標とするべき項目

要素	スキル	Bグレード	Aグレード	Bグレード	Aグレード
		1年 再入門・初級	1年 初中級・中級	2年 再入門・初級	2年 初中級・中級
身体的要素	アイコンタクト	○	○	○	○
	笑顔	○	○	○	○
	ジェスチャー	○	○	○	○
	姿勢	○	○	○	○
音声的要素	発音	×	△	×	○
	強弱の置き方	○	○	○	○
準備方法の要素	ブレインストーミング	○	○	○	○
	要点整理	×	×	×	×
	下調べ(言語)	日本語のみ	日本語のみ	日本語～ 英語含む	主に英語
	聴衆分析	身近な人々	身近な人々	身近な人々～ 一般の人々	一般の人々 を含む
原稿作成の要素	構成(Introduction/ Body/Conclusion)	○	○	○	○
	話題転換を示す語 (説明項目移行の表現)	○	○	○	○
	長さ	30～50 words	50～70 words	50～70 words	80～100+ words
	発表の種類	身近なテーマ	一般的なテーマ	一般的なテーマ	一般的なテーマ
	文法	○	○	○	○
	慣用表現	○	○	○	○
視聴覚的要素	資料作成	○	○	○	○
	資料説明	○	○	○	○
その他の要素	フィードバックと評価	○	○	○	○

5. 3. グレードに対する指導法

表2は、各学年を中級者(Aグレード)と再入門・初級者(Bグレード)に分け、音大生が選択必修科目として英語を2年間学ぶ際の到達目標を示している。

身体的要素とは、プレゼンテーションにおいて非言語コミュニケーションの部分を担っている。非言語コミュニケーションは、表情・視線・姿勢・しぐさなど言語的情報以外を使って行われるコミュニケーションである(高木)。スキルに、「アイコンタクト」「笑顔」「ジェスチャー」「姿勢」が含まれる。表1に挙げられたスキルに「笑顔」を加えたのは、聞き手とコミュニケーションをとり、聞き手の心を開くために欠かせないものだからである(谷口)。指導の一例として、各自に鏡を持たせて笑顔を作らせることがある。自分が笑顔でいるとき顔のパーツはどこにどのように位置しているかを確認し、覚えてもらうねらいがある。プレゼンテーションに相応しいと感じられる身体的要素のスキルは、英語プレゼンテーションのみで使う技術ではなく、音大生にとっては学年や語学レベルに関係なく、演奏発表時にも積極的に取り入れるべき技術である。演奏の前後に曲や自分のアピールポイントなど、プレゼンテーションを行う機会が増えると予想される。特にリサイタルやレクチャーコンサートなど、視聴者と距離の近い場で身体的要素のスキルを利用するのは効果的である。しかしながら、プレゼンテーションにおいて下記の音声・視聴覚要素が取り入れられ論理的に作成された原稿がある状態に、身体的要素のスキルが加わると相乗効果が生まれるのであり、身体的要素のスキルだけで自己発信を行おうとするのは不可能である

し、学習目標からも遠ざかるのは言うまでもない。

音声的要素とは、大まかにとらえると発音のことである。スキルに「発音」「強弱の置き方」が含まれる。「発音」に関して、全体的にリエゾンやネイティブライクの音の指導を行うことは可能である。しかし1クラスに20余名在籍する状態で、Bグレードの学生に対して個別に発音指導を行うのは難しい。一方、Aグレードの学生は基本的な発音は習得済みで（Bグレードと比較すれば）発信語彙も多いため、プレゼンテーションで頻出の単語や、メッセージを伝達するのに必要な語の発音を指導することは可能である。「強弱の置き方」に関しては、全学生に指導することが可能である。音大生は全体的に聴覚が優れているため、話者がどこにどのような強弱をつけているか、容易に聞き取ることができる。指導の際には、各自にプレゼンテーションを録音させ客観的に聞かせるのが効果的である。ただし文章全体の高低の調子（イントネーション）まで指導するのは、Aグレード以上つまり上級者でないと困難であろう。

準備方法の要素とは、原稿作成にとりかかる前段階を指す。スキルに「ブレインストーミング」「要点整理」「下調べ（言語）」「聴衆分析」が含まれる。「ブレインストーミング」が終わると、要点整理と次の項目である原稿作成のスキル「構成」に、ブレインストーミングで出したアイデアをあてはめるよう、一気に指導しているのが現状である。これはBグレードの学生が、プレゼンテーションの準備方法がわからず原稿作成ができないという悪循環を避けるために、教師の目が届きやすいクラス内で作業を行っているのが理由である。ここまで準備しておけば、実際にプレゼンテーションを行う際に白紙状態の学生が出現するのを防ぐことができる。表1に挙げられたスキルに「下調べ」を加えたのは、目標使用言語を設定し、学年やレベルが上がるにつれて技術も上げるねらいがある。1年次では日本語のみで、2年次ではBグレードには日本語と英語を併用させ、Aグレードには英語を主にして行わせるのが望ましい。「聴衆分析」は、表2が習得を目標とした表であるため学年・グレード別に想定される聴衆を挙げた。しかし4.1. に記述したとおり、表1で分析したテキストに含まれておらず、日本の大学で行うプレゼンテーションは通常クラスメートに対するものなので、音大生が受講する授業内で「聴衆分析」を指導する必要性は低いと考えられる。

原稿作成の要素とは、前項目の準備方法を受けて行われるものである。スキルに「構造」「話題転換を示す語（説明項目移行の表現）」「長さ」「発表の種類」「文法」「慣用表現」が含まれる。表1に挙げられたスキルに「構成」を加えたのは、Introduction, Body, Conclusion といったプレゼンテーションの基礎を身に着けさせるためである。Bグレードでは原稿を枠の中に書かせたり、Aグレードでは段落を明確に分けさせるなど、視覚的要素も使って指導する必要がある。また「話題転換を示す語（説明項目移行の表現）」も前述の「構成」と密接に関連しているため、この2つは切り離すことなく教授するのが望ましい。次に「長さ」であるが、これも表1に挙げられたスキルに追加したものである。「下調べ」における目標使用言語の設定と同じく、学年やレベルが上がるにつれて目標原稿文字数を増やし、ライティングの技術を上げていくねらいがある。「発表の種類」に関して、表1で分析したテキストにおいては個人的な話題から一般的な話題に留まっており、問題解決や意思決定など特にプレゼンテーションの種類を定めていなかったため、学年別にプレゼンテーションのテーマを定めた。「文法」「慣用表現」は、表1では言語のスキルとして挙げられていたが、原稿作成の際に指導すべき内容なのでこちらに加えた。

視聴覚的要素とは、パワーポイントや動画などを指す。スキルに「資料作成」「資料説明」が含まれる。「資料作成」に関して、パワーポイントを作成させる場合は難しい可能性もある。設備的問題として各教室にパソコンがなく、個別の問題として多くの学生が携帯・スマートフォンのみで日々の学習や提出物に対応しているからだ。しかし動画を作成させる場合は学生にとって負担が少ないようだ。筆者らはコロナ禍で授業を行っていた際、動画でプレゼンテーションを提出させていた。個人の技術格差があり、動画を作成・提出するだけで精一杯の学生もいたが、中には写真やアプリを駆使して驚くようなレベルの動画を披露してくれた者も少なくない。授業内で

は見たことのない学生の顔や特技が垣間見られ、教師側に発見が得られたこともあった。対面プレゼンテーション練習の合間に、動画プレゼンテーションの提出も含めると、指導の幅が広がり発表方法のマナー化も防げるだろう。「資料説明」に関しては、学生の言語レベルを鑑みるとBグレードでは個人で撮った写真を説明できるレベル以上を望むのは難しいだろう。Aグレードでは事前に指導を行えばグラフや表を説明するレベルに到達できるであろう。ただし、中にはグラフや表そのものが苦手な学生で、作成された表に学生同士の評価を記入するのが困難な者も一定数は存在する。

その他の要素とは、プレゼンテーションを行った後のことを指す。スキルに「フィードバックと評価」が含まれる。表1で分析したテキストの中には、それらの基準を明確に設定しているものと設定が全くないものがあった。学生同士で「フィードバックと評価」をさせたい場合は、プレゼンテーションのテーマに沿って教師が基準の設定や説明を行う必要がある。

6. 考察

5.2. において確認した本学のディプロマポリシーには「現代・過去の音楽、文化、社会に対して多面的な関心をもち」「文化や社会について幅広い知識を身につける」ことが挙げられている。授業および学生の学習時間不足や音楽関連の知識を英語教師が十分には持ち合わせていないことから、この部分を英語教育で担うのは困難である。しかし授業目標に挙げたプレゼンテーション技術や生活言語技術の習得を通して、「自主的かつ自律的に学修すること」をアシストするのは可能だと考えられる。

ただし音大生の現状を鑑みると、教育目標を細分化し音大生が受容できる指導法を考える必要がある。音大生の特徴として、専門分野以外の学習は日々の練習時間を確保した後に進む傾向がある。近隣住民の生活を守るため、大学は学生が自由に練習できる時間帯を制限しなければならない。すると学生は授業後に制限時間まで練習をしてから帰宅する。遠方の通学者にとってはさらに授業外で学習するための時間を確保するのが難しい。

このような学習傾向を持つ音大生に英語を習得させるために、学生の関心・生活・習慣に対応した形に英語授業をカスタマイズする必要がある。第2章でも触れたように、経済産業省が提唱した「社会人基礎力」における3つの要素のうち、「チームで働く力」の下位要素である「自分の意見をわかりやすく伝える力」、「相手の意見を丁寧に聴く力」、「意見の違いや立場の違いを理解する力」は、音大生がこれからの音楽界で活躍するのに必須であり、英語プレゼンテーション教育によって培える技術でもある。

各出版社が売れ行きが良いとして推薦したプレゼンテーション用大学英語教科書の分析(表1)から理解できたことは、音大生にとって1冊で全ての技能習得を扱うテキストは存在しないということである。されど独自のテキストを作成するのは費用対効果を考えると現実的ではない。そこで学年・レベル別に「国立音楽大学の学生が習得を目標にするべき項目」(表2)を満たす項目が多いテキストを選んでいくことになる。「習得を目標にするべき項目」と音大生の特徴を押さえた指導法を学年・レベル別に分けて提示するのは意義のある試みだと考えられる。英語プレゼンテーションの授業目標として掲げている「①内容豊かに、効果的に伝えるコミュニケーション力を身に付ける ②シンプルな英語で行うディスカッション技術とプレゼンテーション技術を身に付ける」ことを達成させるために、自分が担当している学生にはどのようなテキスト・準備・段階を追った指導が必要なのか、専任・非常勤講師を含む英語教師間で共通認識を持つことが可能となるからだ。

本研究では、ディプロマポリシーや英語授業目標を踏まえた英語プレゼンテーション教育について述べてきた。英語プレゼンテーション力の育成に関して、音大生の現状を鑑みることから始め、既存テキストの分析結果をもとに、現実的な「習得を目標にするべき項目」と学年・レベル別に分けた指導法を示した。音大生への教授経験がまだ深くない教師や担当テキストの扱いが難しいと感じている教師に対しても、本研究が悩みや苦勞を軽減する一助となれば幸いである。今後もディプロマポリシーの変更や音大生の特徴および傾向の変化に沿って、授業

目標ならびに指導法を考察し、柔軟に対応させていくことが必要である。

謝辞

本研究は2022年度国立音楽大学個人研究費（特別支給）の助成を受けて行いました。感謝申し上げます。

参考文献

- 岡田靖子, 澤海崇文, いたうたけひこ, 藤井勉 (2017) 「達成目標理論研究の概観と英語オーラルプレゼンテーション指導への示唆」. 日本大学経済学部研究紀要. 一般教育・外国語・保健体育, 51(2), 1-14. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1520009408163576064>
- 経済産業省 社会人基礎力 <https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2023年7月13日閲覧)
- 高木幸子 (2005) 「コミュニケーションにおける表情および身体動作の役割」. 早稲田大学大学院文学研究科紀要 第1分冊, 51, 25-36.
- 谷口政男 (2006) 「プレゼンテーションの実施および能力育成について」. 帝京大学短期大学紀要, 26, 19-32.
- 田村朋子, 野村佑子 (2017) 「大学英語プレゼンテーション教育への提案：グローバル社会で活躍する社会人の英語プレゼンテーションの調査からの一考察」. 清泉女子大学言語教育研究所 言語教育研究, 第9号, 131-142.
- 田村朋子, 野村佑子 (2018) 「大学英語プレゼンテーション教育を再考する：主要テキストに基づく分析」. 立教大学言語文化研究, 第40号, 1-16.
- 中西千春 (2021) 「音楽大学における英語プレゼンテーション授業実践に基づく考察」. 国際教育研究所 Newsletter 特集号, 70-85.
- 中西千春, 川井一枝 (2022) 「英語プレゼンテーション授業における音大生の意識変化 タキソノミー・テーブルと日本語を活用した試み」. 国際教育研究所紀要, 第27・28合併号, 13-24.
- 仁科恭徳, 桐村亮, 吉村征洋 (2013) 「日本人英語学習者の自律学習方略に関する一考察：英・日プレゼンテーションの事前準備に関して」. 明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル, 7(1), 97-111.
- 野中アンディ (2020) 「英語が主体的に話せるようになるプレゼンテーション教育」. 長崎キリスト教短期大学論集, 17(0), 1-11. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jacetchubu/17/0/17_1/_pdf/-char/ja
- メイヤー, エリン (2015) 田岡恵 (監訳) 『異文化理解力 相手と自分の真意がわかる ビジネスパーソン必須の教養』. 英治出版株式会社.
- 山本友紀 (2020) 「大学英語教育においてプレゼンテーションがスピーキング能力向上に与える影響」. 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要, Vol.10, 45-61.